

「神の存在の実践」

“Practicing the Existence of God”

マタイによる福音書 5：13-16

聖学院大学 人文学部チャプレン エバート・D・オズバーン

ブラドミアー・ウルヤノフは 1870 年にロシアに生まれ、度重なる不運と苦闘する家族と共に年月を過ごしました。大人になったブラドミアーは、周りの人々に何とみじめな人だと言われる程、冷酷でひどい人間になりました。大人になったブラドミアー・ウルヤノフは、共産革命運動を促進していた時、レーニンと言うペンネームを用いました。彼は革命運動の指導者としての仕事に取り付かれ、あまりにも没頭してしまったため、自分の同志達にも無神経となって行きました。実際レーニンは思いやりや優しさのほとんどない人になってしまいました。レーニンはクラブスカヤと言う女性と結婚していましたが、彼の妻に対する愛は、ほんの少ししかありませんでした。

例えばある晩、クラブスカヤが重病の母親の徹夜の看病で疲れ果てて少し休もうと思い、テーブルで書き物をしていたレーニンに母親が自分を必要とした時、起こしてくれるように頼みました。レーニンは了解しクラブスカヤは床にくずれるようにして寝込みました。翌朝彼女が起きた時、彼女の母親はもう既に亡くなっていました。ところがレーニンはまだ書き物の仕事をしていたのです。驚き、気が転倒したクラブスカヤは、何故あなたは私を起こしてくれなかったのかと聞き正しました。するとレーニンはこう答えました。「お前は、お母さんがお前の助けを必要とした時、起こせと言ったはずだ。お母さんは死んだんだ。お前の助けは必要なかったんだ。」

この心情はまったく冷酷きわまりないと思いませんか。

しかしこれがロシア共産革命の指導者から期待できることなのでしょう。レーニンは非常に才気ある人間でしたが冷酷で無神経で残忍でした。色々な意味で人間がキリスト教精神から遠ざかることの出来る限界まで彼の心は到達していたと言えましょう。

それではクリスチャンは、このような生き方を、決してどんな時も、していないと言えるでしょうか？以前、私はレーニンと同じ時代に生きた偉大なる作家、レオ・トルストイ(1828-1919)の話をしましたが、お聞きになった方がおられると思います。トルストイは、キリスト教精神の理想的生き方を実践しようと常に努力していたクリスチャンであり、そして彼の小説は紛れのないキリスト教的教訓を持っています。

しかしトルストイは生涯自分自身の努力に決して満足できず、彼の理想の信仰の実践に失敗したことを認めていました。トルストイは冷淡で悩める人間となって行きました。トルストイの妻がこう語ったことがあります。「彼の中には、本物の暖かさなど、ほんの少しもない。彼の親切な行為は、彼の心から来ているものではなく、単なる道義から来ている。彼の伝記は、労働者たちの運ぶバケツの水を、彼がいかに助けたかを語るでしょうが、妻に一度の休みも、又、この 32 年間一度として、自分の子供に水を与えたことのないことも、あるいは、ただの 5 分でも子供たちのそばにいて、妻に家事労働から、少しでも休みをくれようとしたことなどないことを、誰が知りうるでしょう。」(『私の知らなかったイエス』『The Jesus I Never Knew』ヤンシー著, p.136 より)

トルストイの完璧を目指すたゆみない努力とそれに続いて起こる失敗は、彼の心に平安も平静も残してくれませんでした。最後にトルストイは彼の名声も家族も家も自分の身元さえも捨て去り、片田舎のある駅でホームレスのようになり、この世を去って行きました。

この2人のロシア人はまったく異なった信念を持っていましたが、人々への取り扱い方が、時々似ていました。勿論、世の中の人々はトルストイの文学的才能を尊敬していますし、彼の作品の中のキリスト教的テーマは、多くの人々にキリストを紹介する働きをしています。私はトルストイが世界に与えた影響力とレーニンを、ここでどんな方向からも同一視しているではありません。

しかし私の主眼点はこれです。時として、世の中の人々は現実において、クリスチャンとノン・クリスチャンの行いの違いを見分けることが出来ないと言うことです。

アメリカでは、犯罪が目撃されても犯人が明確ではない場合、警察は容疑者を壁に並ばせ、隣の部屋の片面からだけ見えるガラス窓を通して、目撃者に本当の犯人を認定してもらうやり方があります。

例えばもし、標準的クリスチャンの生活行動と、標準的ノン・クリスチャンの生活行動とを比較したら、この2人の行いからどちらがクリスチャンであるか見分けることが出来るでしょうか？できればよいのですが、時には見分けることが出来ないのではないかと思います。

ベトナム戦争から役目を終えて、やっと国へ帰って来たあるアメリカ軍人の話を讀んだことがあります。サンフランシスコに到着したその軍人は両親に電話をしました。「お母さんお父さんこれから帰るところですけど、一つ頼みがあります。もう一人ボクと一緒に家に連れて帰りたい友人がいるんです。」と彼は言いました。「勿論、喜んで会いましょう。」と2人は答えました。

「行く前に一つ知らせておきたいことがあります。彼は戦場で地雷に当たり重傷を負い片手片足をなくし帰る家がないのです。そこでボク達の所で一緒に住むために連れて帰りたいのです」。

「それは気の毒だ。なんとか彼の住む場所を探してあげられるだろう。」と電話の向こうの親は答えました。

「そうじゃないんだ。ボクは、彼を僕たちと一緒に住むためにつれて帰りたいんだ。」と息子は言いました。

「だけど、お前にはそれがどういう事なのか分かってないんだ。それだけハンディキャップを持った人を世話すると言う事は、私たちには大きな重荷になるだろう。私たちも自分の生活があるだろう。その人の事は忘れて速くお前は家に帰って来なさい。その人は自分でちゃんとこれからの場をさがすことができるだろう。」と父親は言いました。

そこまでの会話で息子は電話を切りました。その数日後、サンフランシスコ警察からの電話を受けるまで彼の両親は息子の消息を知る事はありませんでした。その知らせは彼の息子がビルから転落死したというものでした。警察は恐らく自殺だと言いました。そして両親は身元確認のために、サンフランシスコまで至急来るようにと言われました。

悲しみに暮れた両親は飛び立ち、死体保管所に連れて行かれました。そこで直ちに息子を確認しましたが、息子について一つ知らなかった事が分かりました—息子は片手と片足を失っていたのです。

これは本当に痛ましい悲劇です。彼の両親がクリスチャンであったかどうか私には分かりません。しかし果たして、私たちがこの立場にあって、自分の息子に手足をなくした友人を家に引き取り、一緒に生活してもよいかと聞かれても、この両親とは違う判断をしたでしょうか？このような難しい決断に迫られる事は、私たちにはあまりないでしょうが、私が今日指摘したい点を皆様はお分かりいただけたと思います。

私たちの信仰は私達がクリスチャンであることをはっきり表し、私達の行動に影響を及ぼすものでなくてはなりません。しかし時として、それは成されていません。人々は時々、クリスチャンとノン・クリスチャンの見分けがつかない事があります。

しかしながら、こうであってはいけないのです。私達は神を信じない人々と違った生き方をすべきです。私達の行いは、自ずと主イエス・キリストに仕える者である事を明らかに示すものであるべきでしょう。私の大好きなクリスチャン作家フィリップ・ヤンシーが呼ぶところの「神の存在の実践」がこの事です。

神の存在を実践すると言う意味は、私達が本当に神を信じているのだというように行動する事です。ある哲学者が言いました。「人は信じている事を実際に行なう時に、本当に、そのものを信じる事になる。」わたしたちも本当に神を信じているのなら、そのように行なわなければならないのです。

山上の説教の始めに、イエスは弟子達に言われました。マタイによる福音書 5:13「あなたがたは地の塩である。だが、塩に塩気がなくなれば、その塩は何によって塩味が付けられよう。もはや、何の役にも立たず、外に投げ捨てられ、人々に踏みつけられるだけである」。

そしてイエスは続けて言われました。14 節～15 節「あなたがたは世の光である。山の上にある町は、隠れることができない。また、ともし火をともして升(ます)の下に置く者はいない。燭台の上に置く。そうすれば、家の中のものすべてを照らすのである」。

そしてイエスは命令をもって教えを締めくくっています。マタイによる福音書 5:16「そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。人々が、あなたがたの立派な行いを見て、あなたがたの天の父をあがめるようになるためである」。ですから私達クリスチャンは、それぞれ自分に聞き正さなければなりません。「自分は自分の良き行いによって周りの人々に光を本当に輝かし、天の父なる神の栄光をあらわしているだろうか」と。

皆様はどうでしょうか？さて、私自身はどうでしょうか？

私達はそうであるはずでしょう。私達が地の塩となることが実に神の御旨(みむね)であります。つまり、私達は社会の一員であるその社会を清め、又、この地上において神の理想の防腐剤のように行動すべきであります。そして又、私達が“世の光”となることも神のみ旨です。霊的暗闇の中を歩む世の中の人々のために「わたしは世の光である。私に従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ」(ヨハネによる福音書 8:12)とされているイエス・キリストの道を、私達は示す道しるべとして仕えるべきなのです。

確かに世の中は光を必要としています。現代社会について言いますと、例えば前チエコ共和国大統領、または、神を否定し生きようとした共産圏の生き残りであったバクラフ・ハベルが次のようなことを言いました。「現代社会においての神の喪失によって、人間は絶対万能の調和体系と言ったものをなくした。それによって、人はすべてをまず第一に自己に帰するものとなったと私は信じる。」

「グローバル・ポジショニング・システム」GPS;と呼ばれるアメリカ航空システムを皆様は、知っておられると思いますが、これは地球の軌道上の至る所に置かれた 24 個の米国人工衛星基地を基礎としています。(又、この人工衛星基地を「NAVSTAR」(ナビスター)と呼んでいます)。GPS はもともと軍事用に開発され、基本的目的は今も変わりありませんが、一般の車・交通機関や航空機関、あるいはハイキングやハンティングなどのアウトドア活動にも大変幅広く利用されています。GPS がこれほど役立つ理由は、勿論、地上の人物や物体を素早く正確に的確に突き止めることが出来るからです。

私は神の御言葉、聖書とそれに聞き従う人々を霊的 GPS、つまり最初の頭文字 G は、『神の』=God's で、『ゴッズ・ポジショニング・システム』と置き換えて考えたいものだと思います。世界のどこにいても人々は、クリスチャンの生活・行いを見て、神の与えて下さる影響・感化を知るものでありましょう。

アッジの聖フランシスはこのことをよく知った人でした。ある日彼は一人の若い修道僧に言いました。「今日は街へ伝道に行きましょう」。修道に入り間もないその修道士は、聖フランシスにその日選ばれたことを大いに喜んで、嬉しそうについて行きました。そして彼らは街に出、大通りを歩いて行きました。又、彼らは脇道も裏通りも歩き、やがて市街へ通り抜けて行きました。

そのぐるぐる回った長い徒歩の果てについた所は、何と自分達の修道院の門の前でした。門に近づいて行く時、狐につままれたようで、又がっかりしたその若い修道士は、聖フランシスに自分達が街に行った理由を思い出させるために言いました。「神父様、街に伝道するために行ったことをお忘れになったのですか?」。すると聖フランシスは答えました。「伝道はしましたよ。歩いている間に伝道をしました。沢山の人々に私達は見られました。私達の態度はしっかり多くの人々に見られました。私達が説いた朝の説教はその歩みの中にあつたのです。私達が歩むすべての場所で伝道しない限り、伝道のために何処かへ歩いて行くのは意味の無いことでしょう。」「私達が歩むすべての場所で伝道しない限り、伝道のために何処かへ歩いて行くのは意味の無いことでしょう。」

私達のすべての歩みうちで神の証しの伝道をしようと、今日この日から決心しましょう。

「地の塩になりなさい。世の光になりなさい」と言われたイエスの命令に従いましょう。

「神のポジショニング・システム」となりましょう。そうした時、人々は私達を見、主が働いておられることを知るでしょう。

神の存在の実践をいたしましょう。

2012年 11月20 日 聖学院大学 全学礼拝